

報 告

晩近南方諸言語研究の動向

印度洋太平洋地域言語学的諸問題
専門家会議をめぐって

泉 井 久 之 助

1 ま え が き

わたしがこの度、にわかにヨーロッパへ行ったのは、ロンドン大学で開かれた上記の「印度洋太平洋地域言語学的諸問題専門家会議」へ招かれたからであった。会議はロンドン大学の School of Oriental and African Studies が主催し、東南太平洋諸言語の専門家として令名のあるその教授 G. B. Milner 氏が中心となって長い期間の準備ののちに開催されるに至ったもの、わたくしたちの許にも4年ばかり前からこれについて次第に相談がかけられていたが、遂に、上記の地域に戦前から政治的關係が深かった英国が開催を引きうけて漸く本年1月の会議となったのである。会議の対象となる言語区域は上記の範囲の全域にわたるのがその本旨であったが、事実上マダガスカルおよびアフリカの印度洋岸の言語研究に言及した人はなく、アラビア、ソコトラ、西アジアなどのそれにも触れられず、対象となったものは、インドおよびインドから東の方、大体東南アジアと称せらる地域の沿岸区域、および太平洋諸島の全域であって、それも今回は東太平洋区域（すなわちメラネシアをふくみながら主としてはポリネシアの区域）に重点がおかれ、この区域を「東大洋州言語区域」（East Oceanic linguistic area）と新しく呼称しながらここに力点を置いて活発な討論が行なわれた。そしてこの区域中においてマライ・ポリネシア諸語とは別系に属するニューギニアの山地諸言語が、主として濠州の学者によって戦後新しく大きい規模の下に研究の対象とせられて来た結果の一部も併せて公にせられたことは、この度の会議の大きい成果の一つとすることができると思われる。

2 Wurm 教授の論文

濠州それ自体の土着言語については、特に新しい大きい成果の発表はなかった。提出されていた論文49篇（しかし実際に出席は40余人）のうち、それに関してはただ1つ、濠州の S. A. Wurm 教授の 'Recent developments in Australian linguistics' があるだけで、Wurm 教授はこの紹介論文によりながら Pater W. Schmidt 以後の濠州諸言語の言語学的（主として系統論的）な研究発展の状態を説明せられた。この未開拓の言語領域におけるその後の研究発展とその結果については、一同ひとしく期待したのであったが、結果はいまだ十分なものを齎していない様子であった。——その結論を先取的にここで述べてしまうことが許されるならば、Schmidt は、濠州西北部の土着諸言語はそれぞれ1つずつが系統的に孤立の言語であって、互に系譜的關係を持たないものであるのみならず、濠州の爾余の地域における他言語の一方とも系譜關係を立証し得ないものとみとめ、西北以外の地域に行なわれる言語のみについて、そこに幾つかの同系性の存在をみとめ、この関係（と彼がみとめるもの）に従って彼は数個のグループに分類したのであったが、それは大綱において今も正しいと考えてよい。研究はその後、A. L. Kroeber, P. Elkin, そして殊に最近の A. Capell に至って新しい時期を迎え、Capell は西北を含む濠州全域の諸言語について全体的な 'Common origin' をみとめ、これらの言語は typologically に 'prefixing languages' と 'suffixing languages' に二大別できるけれども、この区別は、すでに 'Proto-language' における 'Proto-type' が自由な要素順を持っていたことによってすでに二分の萌芽

をふくんでいたもの、従ってこの区別は全体の同系性の証明に決定的な障害となるものでなく、ただこの大きい構造類型上の区別を維持するほどの歴史的な離隔は、流石に両語群の語彙の組織、語形の構成上にも大きい影響を及ぼしている事実のみとめなければならない。しかし深く分析することによって得られる全体としての起原的な共一性の存在は逸することができないとするのであるが、Capell のこの考えに対して Wurm 教授は、濠州の土着言語の世界は元来それぞれの言語団体においていわゆる多言語使用の傾向 (multilingualism) がはげしいところ、従って語の貸借関係とその定着度が著しいために音そのものの交錯と平均化も著しく、音韻の対応関係も従ってまた乱され勝ちであり、その借用と同源との見分けを誤ることが多いと考える。要するに全体として A. Capell および S. A. Wurm 教授をはじめ、1961年に創設せられた Australian Institute of Aboriginal Studies (in Canberra) の学者たちの近來の研究によっても、事態の究明はいまだこれからというところであって、わたしたちの見るところによっても、諸言語の系譜的な群括 (grouping) の試みは、殆んど信頼するに堪えない音韻対応の上に一応たよりつつ、単に語彙的要素 (いわゆる語および形態素) の外見的な相似形の場合を数えて、それが一定範囲の語彙の広がりのうち何パーセントを占めるかに基づいて、「同系度」を算出し、そのパーセントの段階によって或いは「語族」、或いはいわゆる “phylum” を建てるという、きわめて恣意的な行き方を取っているために、土着濠州比較言語学は、今日においても、実質的にはいまだ何ほどのことも果していないということができよう。しかし上記の新しい Institute の活動はすでに活発である。次第に事態は無益な努力を節して、着実に改善せられ、同系性の証明の可能と不可能の場合は明確に区別せられてゆくであろう。われわれは、いつも、目の前にあらわれる一群の言語があるからといって、はじめから遮二無二、その同系性の樹立のみを目指して、不合理を冒しつつ無益な努力を重ねなければならないという理由はない。——土着濠州の言語について会議で言及せられたのはこれだけであったが、その討論さえ、同系度の算出という「アメリカ式近代比較言語学」的な方法論の論議に空転して、実例に基いての具体的な議論が進行しなかったのは遺憾であった。

国際的な一般会議 (Congress) でもよくあることであるが、異なる専攻分野の人たちのあいだで討論がおこなわれる場合、具体的事実を路傍におき捨てて、単に方法論や感想的批評に論議が空転することが多い。この度の専門家会議 (Conference) においても、特にアメリカのひとりの学者のせいもあって、この傾向は助長せられることが多かったと思われる。——但し、上記の発表をせられた濠州の Wurm 教授は、篤実で有能・精力的な学者であることは、十分つけ加えておかなくてはならない。同教授によって、New Guinea の山地民族の諸言語の最近の成果については、新しい報告が行なわれた。(後述)

3 会議の暗示するもの

さて会議は、1月4日の打合わせ会と招宴のあと、実質的には5日から始められた。そして8日の午後、会議のあと始末の集まりがあって終了したのであったが、その4日間も常に、(ひとりの人によってその勢いが助長されるところがあったとはいえ)、ともすれば、論議が方法論に始終して空転する傾向はやむことがなかった。その理由は相当深いところにあったと思われる。端的に言えば、いま、言語学全体が、たといそれと意識されていなくても、実は大きい混迷になやんでいるからである。それは、この会議以前からの問題であり、この会議が対象とする言語領域をこえる一般的な問題でもあった。従って、会議における以上のような有様、あるいは傾向は、はじめから予想せられなかったものではなく、わたくしたちは、むしろ、特殊な上記の限定領域を対象とすることによって、この混迷解決の緒だけでも、この会議で与えられることを期待したのであった。

一般に学問的な研究は、その発展の段階において、一定の現象、たとえば言語の世界に関し、そこに一定の pattern を見出し、これに新奇な意義と興味を発見して、該当する事実をひろく蒐集し、そして、すべて蒐集家というものがおのずから導かれるように、蒐集せられたものの分類に進む「蒐集・分類」の事実段階と、これに続いて事実から帰納的にその整理の理論を抽出するのみか、更にその事実の世界を全体として一つの秩序の下に置き、一つの原理からの演繹によって説明することを企図する演繹的な理論の段階とがある。言語学について云えば、前者は主として史的・比

較言語学を中心とするところの、ある論者たちのいわゆる「伝統的言語学」であり、後者はアメリカの構造主義とその発展を中心とする、いわゆる「近代言語学」である。

4 いわゆる「体系」について

このいわゆる近代言語学が、その建前において演繹的であるといえ、或るいは奇異に思う人があるかも知れない。むしろその反対を考える方々も多いであろう。しかし、ここにいう近代言語学は、Hjelmslev の Glossematics ほどに explicitly にではないにしても、本質においてやはり演繹的であり、その理論演繹の源頭として設定（もしくはむしろ仮設）せられる原理は、「言語はすべて完全な体系である」ということであった。果して言語は完全な体系をなすものか否か、これはいまだ決定できない問題であるが、de Saussure 以来のいわゆる近代の言語学書では、体系 System という用語が無数に、随所に用いられているのは事実である。しかしその「体系」とは果してなにを指すのか、実は明きらかにせられたことがない。「部分が互いに張り合っている全体」というだけでは、体系というものを向うに措定して、それに手の届かぬ一種の「憧憬」を覚えながら、単に理念的・観念的に想像した姿をいうだけであって、少しも具体的な説明にはなっていない。しかも「体系」という用語は頻繁に現われながら、それに含ませられる意味と観念像とは、論者によってそれぞれ様ではないのである。なかにはこの用語を煙幕に利用して、自らの証明能力の不足と論述の不十分を掩いながら、その具体的な説明を置き捨ててしまう人もないではない。これではその「科学性」を誇示する近代言語学も Kant のいわゆる「内容を欠いた理念」として「空虚である」ことになる。近代言語学の人々のいう「体系」も、実は皮相な要請 (postulatum) に過ぎないのであるまいか。むしろ言語には「体系性」(Systematicity) があると見ておくのが、今のところ、より安全であり、より実態に近いというべきであろう。またこの方が「言語は一つの体系である」と臆断的に限定するよりも、より多く適切に、言語に本質的なその動的な性格を含蓄的に把握する「よすが」とすることができるのではあるまいか。この度の会議でも説明の原理、あるいは逃避の場として system の用語は頻繁に聞かれたが、その

たびに、わたくしたちには、困惑と疑惑と、そして理解のあいまいさが、増すばかりであった。（——わたくし自身は、その範囲が明確に有限である秩序体にたいしてのみ、「体系」の語を用いたいと思っている。たとえば、古典ギリシャ語の動詞の coniugatio の体系、Cicero におけるラテン語の同じく coniugatio の体系、Chamorro 語における所有代名詞の体系など。しかし一つの言語の全体は予見しえない (unpredictable) 展開の可能性を無限にふくみ、また現に体系をこえてそれを展開しつつあるのである。）

ここであまり以上の点に深入りしないのが、この稿にはふさわしいかも知れない。しかし、この段に一応の結末をつけるためになお数語を加えることが許されるならば、いかにも言語学史的に、事実段階は言語の歴史的な見方を中心として研究者が活動した段階である。そこでは歴史には必然的に多少とも附随する条件としての資料の不充足がありこの故に、言語を断片的に取り扱う比率も高かった。これに反して、言語の“synchrone”な究明の必要と優位とをととえる「近代言語学」は、一つの言語におけるすべての言語事実の可及的に完全な同時的存在を見出すために、勢い、観察者と同時代的な目の前の言語、耳の横の言語、すなわちその母語の現代のすがたを研究の対象とすることになり易い。そこではその一つ一つが「完全な体系」をなすという想定、または要請的原則の下に、さまざまの levels の分析と記述とを進めてゆくのである。しかもその想定の基となった「体系」はいまだ曖昧であり、各人各様、想定の内容も様ではない。想定が比較的明瞭であり、各人の指向が比較的一致し易いのは、有限度の高い音韻論の部分においてのみである。その他の部分について、その研究者は、自分の母語に関してさえ、構造を“exhaustive”に、合理的に記述をしつづることが出来ていない。努力は常にただ進行的に“exhausting”の段階であって、これでは母語の“system”なるものを具体的に描き切ることはいつまでもできない。しかも「言語は常に一つの体系である」と呼号し、これを前提としなければならぬのは、論理的にも“hysteron-proteron”である。そしてこの程度においてさえ、この種の研究者は、確信をもって取扱いの対象とできる言語が、通例、自分の母語のほかにはないことに悩んでいるのである。外異の言語については、従来の経験と教えから与

えられた手法と枠に従って、偏に器械的に記述を進めてゆくよりほかはない。そこには無理があり従って不安の自覚がある。ために却って硬直した論議を空転させ、常に「言語は体系」を呼号させることになり易い。しかも、いまだに「伝統的な言語学」と「近代言語学」との関係を、古典物理学と相対理論以降の近代物理学との関係に比較し、共に前者が後者によって決定的に質的な変化を浴せられ、すでに超克せられたかのようにその essay の冒頭から前提として説く人もある。しかし世にこれほど失当な比較はない。言語と物象とは本質的に異っている。新しい物理学によって新しい物象の世界が具体的に開かれたが、言語はいくらその見方を変え取扱い方を変えても、依然として同じ言語がそこにある。言語は割り切れないのである。その悩みは史的言語学の、系統論における新しい手法、たとえば M. Swadesh の glottochronology (または狭義の lexicostatistics), Joseph Grimes と Fredr. B. Agard の phonostatistics の試みに関しても同じである。それはこの会議にもあらわれていた。努力と苦心は大きいけれども、結果は容易に定着しないのである。

5 会議の経過

会議の日程は、事前に提出せられていた論文の内容による分類を基準として、次のような項目に仕組まれていた。論文によっては内容上、二つ以上の項目に組み入れられていたものもある。

1月5日：(1) Problems and Purposes of Typological Studies.

(2) Mathematical Methods in Linguistics.

6日：(1) Criteria for Historico-Genetic Classification.

(2) Regional Groups aimed at the Discovery of Agreement and Disagreement in current Historico-Genetic Hypotheses.

Groups: 1. Austro-Asiatic. 2. Sino-Tibetan. (Tai, Burmese); 3. Austro-nesian (Indonesian, Northern, Formosan). 4. Eastern (Oceanic).

7日：(1) Problems and Methods of Grammatical Statement.

(2) Language and Dialect. Language Boundaries. Styles and Standards. Affective Language.

8日：(1) Borrowing and Contact between Languages. Problems of Translation and Interpretation across Cultural and Temporal Barriers.

(2) (Business Meeting).

各自が提出した論文は早く事前に複製して互の手許に送られてあった。出席者はその内容を互に既知しているものとして、会議の運営は各自がその内容の上に立ち敷衍もしくは結論の強調によって、各項目の趣旨と意見を述べる方式であった。

第1日の(1)については主として typology の genetics に対する関係、その系統論への寄与の問題が論議の中心となったが、もちろん明瞭な結論が出るわけではない。わたしが提出しておいたのは、“The languages of Micronesia, Unity and Diversity,”であったが、この明瞭に同系のマライ・ポリネシア系諸言語が行われる狭い海域の言語の中にも、Palau 語と Truk 諸言語の間には構造様式において例えば古典ギリシア語と英語ほどの差があること、しかも明瞭に同一系統の言語であることを述べて、typology は同系性の証明努力の初段階において、valuable guide’ではあり得るけれども、‘sufficient proof’にはなり得ないことを述べておいた。

午後の(2)においては、やはり glottochronology が Dyen 氏などを中心として種々に論議せられたが、座長をつとめた Milke 氏が惜しんだようにアメリカにおけるこの方面の細密な批判者 Chrétien 氏が欠席のため、議論は自熱的となるには至らなかった。Isidore Dyen 氏には本年発表した A lexicostatistical classification of the Austronesian lgs. (Supplement to IJAL, vol. 31, No. 1) がある。結果は浮動的で遽に肯定することはできないけれども、多くの言語にわたって計算に熱中したその熱意には敬意を表さなくてはならない。ただ Austronesia の言語にも tabu

(1) たとえば, László Antal: Questions of Meaning. Janua Linguarum, Series Minor No. 27, The Hague (Mouton), 1963, p. 7.

にかかる言語要素が多く、また互に借用語も多い。しかも借用語は同系の言語間であるために容易に ‘naturalize’ するつよい傾向がある。併せて共に lexicostatistics の ‘-statistics’ の基本材料の選定をあやまらしめる危険が多い。lexicostatistics も一つの ‘valuable guide’ ではあり得るけれども、言語には語彙のほかに morphology の組織、syntax の構成様式がある。たとい同系の(この場合は Austronesian)言語の間であっても、その ‘typological classification’ にはこれらの点を考えなくてはならない。要するにこの ‘-statistics’ にはいまだ ‘accidentality’ と ‘incidentalness’ が多すぎるのではあるまいかということに落ちついたといつてよい。——この席では statistics の他の面の応用、たとえば我が国でも行なわれている標準偏差 (standard deviation) の問題が論じられることがなかった。これは第3日(すなわち1月7日)の(2)の時にも、‘styles’ を扱うことになっておりながら、遂に論じられることがなかった問題である。出席者が大体において比較畑の人が多かったためであろうか。——Wurm 氏はこの席で、本稿のはじめに紹介したような、濠州諸言語の ‘cognates’ の percentage による同系度の研究を紹介せられたが、その評価もまた本稿のはじめに述べたとおりである。Wurm 氏に限らず、この日の論議は一般に抽象的に終始した。数理を駆使し分析の厳密に努力して「科学的」な成果への接近につとめながら、結果が却って皮相的になり浮動的となって、現実から「科学的」に遊離するとはどうしたことであろう。こうした憂慮はわたくしのほかにも、欠席の S. Takdir Alisjabhana 氏の論文 (The problems of the standardisation and modernization of the Malay-Indonesian language) にもつよくあらわれていた。これを目して London の R. H. Robins から危険な傾向だとの発言があったが、その理由の説明は何もなかった。氏の受動的な学風から見れば、ただ流行の科学主義を承けてむしろ器械的に一言せられたのみであろう。しかし主催の Milner 教授はその経験によって言語の研究は、中世のいわゆる四学 (quadrivium: 音楽、天文、幾何、算術) よりも三学 (trivium: 文法、修辞、論理学) のなかにこそ triumph を見出しうるであろうとする人である (Trends in Modern Linguistics, 's-Gravenhage, 1963 の中の p. 62)。

Robins とは反対の意見であったと思われる。しかし全体の責任者として氏は敢て発言せられることはなかった。

第2日(1月6日)の(1)は、問題の性質上、一層 Dyen 氏の独り舞台であった。あいまを縫って議論は多くの人からも出されたが、論議の中心となったのは、いかにも「近代言語学」の場らしく、事実段階による帰納的な方法とこれに関係する問題よりも、原理に基く演繹問題に終始して、たとえば音の変化において、 $t \rightarrow t^h$ よりも $t^h \rightarrow t$ が一般であり、高声調の所が [ʔ] になるよりもその反対が一般と認むべきであり、その言語の史的資料を欠く場合、この原則を推進してよいとするという種類のものではなかった。しかし前者に関しては近代ゲルマン語の多くにおいて以前の t が t^h となった例がおおく、デンマーク語のいわゆる ‘stød’ が Jespersen が証明したように高声調に由来している場合もある。一つの原則がどこまでも通るということが困難なのが言語である。ただ若干のタイ諸語と見られるように、 $kl- \rightarrow kw-$ のように一定の条件下で $-l- \rightarrow -w-$ となる現象が、英語の *walk* における $-lk$ が $-wk$ を経て [wɔ:k] を発現せしめたように、 $l \rightarrow w$ はあってもその反対は稀であることが、この会議の対象とした言語領域においても一般に考えられないであろうか。この日のこの項目においては、重要なのは事実による帰納的 inductive な方法であると、すべきであったと思われる。

第2日の午後における(2)は、上記の4つが1—2と3—4の2つの部会 (special sessions) にわかれて行なわれたが、わたくしが出席したのはその後者であった。

そこにおいて終始、問題となったのは、Austronesian (Malayo-Polynesian) ⁽¹⁾において、Otto Dempwolff のいわゆる「前鼻音化現象」(Pränasalierung) をめぐる問題、殊にその起源の問題であった。この現象には、例えばマライ語において、*dəŋar* (**dəŋar*)「聞く」の形に対して接頭辞の *mə-* がつく

(1) この二つの用語を Dyen のように区別して用いるひともある。区別の根拠は、わたくしには明瞭でないところもあるが、大体、前者は同系語としての Malayo-Polynesian 諸語以前(または以外)の南洋の言語をふくんで用いるのではないかと思う。

場合、語頭の *d-* を *nd-* として（すなわち同器官的な鼻音を前に増添して）*mə-ndəŋar* とするような鼻音前添または鼻音前出（nasaler Zuwachs）の場合と、*pukul* (**pukul*)「打つ、投げつける」にたいして、*mə-mukul* とするような語頭塞音を、同器官的な鼻音をもって置きかえるところの鼻音代償（nasaler Ersatz）の場合とがある。今日のマライ語では、これは語頭の塞音にたいして行なわれるのみであるが、その以前または一般マライ・ポリネシア語的には語頭以外の位置においても、たとえば *puŋkul* のごとき形があったことが立証せられるのみならず、古いマライ語では時に有声塞音 *d-* にたいしても無声のそれにたいするように鼻音代償があって、*me-nəŋar* の形もまた文獻的に在証することができる。のみならず一般マライ・ポリネシア語的にこの現象は接頭辞の有無に拘らず存在しえたものであって、それは Truk に語において **ndəŋar* から来た *čəŋ*「音、（特に）足音のひびき、振動音、tremor」の形が痕跡的に存在することによって証明せられ、その他一般マライ・ポリネシア語的に *patay*「殺す」に対しても、今は無関係（非有機的）に孤立した *matay*「死ぬ、死」がある。これらの現象の起源は何であったか、その基本的な機能は何か、については、いまだ 'Austronesian Linguistics' にあって解決がついていないのである。

会議でも改めて古いこの問題が論じられたが、もちろん遽に解決がつくことはない。わたくしはこれにたいして、いくらか類似する現象として、⁽¹⁾ Celtic 諸語におけるいわゆる 'Lenition' の現象を挙げ、その起原と本来の機能とを、Celtists の研究を参考しつつ考察することは有意義ではあるまいかと附言しておいた。Celtic には、たとえば現行のウェイルズ語 (Welsh) においても、女性名詞「庭」について *gardd~ardd~ngardd* があり、「デスク、机」について *ddesg~nesg* があり、なお「母」*mam* に対して *fam* もある。すべてこれらは一般印欧語的に説明しえないものであって、ただ Celtic においてあらわれる。しかし Celtic においても古来、方言的にあらわれ方は様ではない。依然としてその起源、理由と本源的な機能は今のところ解明せられていない。恐らく解明し尽されることはないであろう。マライ・ポリネシア諸語における前鼻音化の現象についても事は同様であろうと思われる。しかし互の研究進展を中間段

階で交換しあうことは無意義ではないにちがいない。

この session ではまた B. Biggs 氏の Direct and indirect inheritance in Rotuman をめぐって論議があった。やはり長い時間をかけて事実を直接具体的に詳しく調査し丹念にまとめられたこの結果は、それだけで、それ自身の価値を持つものであった。これはマライ・ポリネシア諸語の中において、東部、特にポリネシア諸語一般にのみ特有の語（詳しくは word-bases）を選別・明示してその他のもの（即ち西部特にインドネシア語と共通のもの）と対照的に表示したものを基礎として Rotuma 語の系統的な位置を論じたものの。総数約300項目である。わたくしに取っては、Micronesia の中部以東の言語、たとえば Truk 語が、この表に照してマライ・ポリネシア語の東部と西部のいずれにより深い関係を持つかを見出すことに先ず興味があった。一般にメラネシア系とすべき Truk 語にもポリネシア的な要素が乏しくないとなわたくし自身には一応は考えられていたからである。しかしこの表に Truk 語をあてはめて明確な Cognates を算えた結果、約300項目中約170項目、すなわち約56%語の cognates が見出されたが、その殆んどすべては同時に西部にも（すなわちインドネシア諸派にも）明確な対応関係を持つものであって、純粋に東部のみに固有の要素は Truk 語 *očo*「食物」（東部形 **onso*, cf. Fiji *očo*, Tonga *oso*, etc.）; Truk 語 *tam*「カヌーの outrigger」（東部形 *(*n*)*sama*, cf. Fiji *čama*, Tonga *hama*, etc.）など類例にすぎなかった。Truk 語は広いマライ、ポリネシア語域における辺陲の小区域の言語にすぎないけれども、その言語は意外に東部よりも、むしろインドネシア語派などの西部と起原的に共通の要素をふくむことが多いものであった。この事実は、少なくとも Truk 語（およびミクロネシアの言語）が、Nukuoro および Greenwich=Kapingamarangi のポリネシア系の二言語を除いて、この区域への流入定着の過程において、大勢的に、東よりむしろ西からであったとすべきことを示していると思われる。もちろん同区域の他の言語の語彙については、それぞれ別に考察しなくてはならない。——Biggs 報告は少なくとも私にとって非常に有益であった。私はこの Session の終りに、上のことを述べて

(1) これを soft mutation と称することもある。

同教授に感謝の意を表したが、同教授からは自分の報告がそのように利用せられたことは意外であり喜びである、との挨拶があった。

第3日の(1)——すなわち“grammatical statement”の方法と技法の問題においては、すでにそれぞれの方法と主張を持つ人々の集りであるために、特に意見の統一を図る必要もなく、結局、意見は静かに行き違うだけであったが、時に応じて細部に関し、少数ながら実例をもって説き合ったことは意義があり互いに裨益があった。しかし流石に今更、いわゆる伝説的な手法と近代的な文法技法との優劣を改めて論じることはなかった。問題が真剣に具体的な言語事実に具体的に対処する場合になれば、ただ規範的・教条的に与えられた技法は問題とならないからである。言語学の発展は、新旧を問わず、与えられた技法だけの受動的な遵守にあるのではなく、既知と未知の事実の詳細・網羅的な探究と、それにたいするみずからの洞察と、その結果を客観的なことばと記号で正確に記述して進んでゆくより外にはない。

この日は、Haudricourt, Kähler, Henderson 氏らの発言が多かった。

午後の(2)においては、問題が標記のように広汎で異質のものが一つに集められていたために、時に焦点が曖昧になるきらいもあったと思う。翻訳の問題に関して A. H. Johns 氏が14世紀の古い Java 語のテキスト Nāgarakṛtāgama の訳例を示しつつ、「言語学の理論や技法に習熟しただけでは言語の理解のたしにはならない。しかし存在するその言語の資料がすでに限られているとき、残存する言語資料の正誤をえた理解へ向って、それは有効な寄与をなすこともある」と云われたのは一応正しいであろう。氏は上の訳例によって言語学の寄与の効果を示そうとせられたのである。しかしそれにはやはり文献学からの寄与をも同時に期待すべきであろう。言語学の理論と技法も万能ではない。そこに独断がないとはかきらない。文体論に関しては、予想せられたことながら、まとまるどころがなかったと思われる。その研究の手法については用語用字の統計学的な研究も必要である。統計問題もここではあまりあらわれて来なかった。しかし一方、文体論で、より重要なのは各言語、各使用者における、表現の糸における「意味のリズム」の摘出であろう。古典ラテン語は外形的には語順は様々になっていて、今

はイタリアの人をさえ悩ますことが多い。しかしそれが正しく古典語であるかぎり、そこには意味のリズムがある。われわれはこれに頼って読み進むのである。1666年の大火災を記念したいわゆる London Monument のラテン文が簡単な内容ながら読みにくいのは、そこに意味のリズムの一定性がないからである。

第4日は午前中、やはり上に標記したような趣旨の下に論議が行なわれ、language contact とその言語系統論に及ぼす影響、異系の言語が重層をなしつつ一つの言語を形成する場合、その新言語の構造の特徴は印度洋・太平洋区域の諸語において、また特に言語の何れの構成部分にあらわれるか、また借用語の定着度の問題もあつかわれた。

しかしこの Contact の問題の論議において最も遺憾であったのは、太平洋における明瞭な異系且つ異型の言語の Contact の結果として最も注意すべき Pitcairn 島の言語が、特に論議にもならなかったことであった。この言語は映画にも近年扱われたような「戦艦 Bounty 学の叛乱」の結果、ポリネシアの男女を携えて、1790年、東南太平洋の無人島に占住した叛徒の後裔の間に成立して今日に伝えられる英語とポリネシア語(Tahiti語)との混成語である。その英語は今日の文献から見れば、Scotch であった。「泣く」を Tahiti 語 *tani* によって *tai* といい、「耳」を Tahiti 語の *tariŋa* によって *taria* という如きほかに、英語からの転訛形も多く、“How are you?” を [wetawéi ju] (Scotch: What a way (are) you?) という。Contact の興味ある事例である。

午後は business meeting として、会議の将来計画(これは委員をあげて別に論ずることになった)、報告の出版問題(これは雑誌 Lingua の好意によってその特輯として刊行せられることになった)、などが議せられ、Cecilio Lopez 氏と私が1966年度の太平洋学術会議(Pacific Science Congress, Tokyo)の言語学関係事項について説明し、私は別に八幡さん、三根谷さんからあずかって行った資料について紹介した。

6 会議の成果

会議ははじめ、上に述べたような近年の言語学にまつわる混迷がそこに漂って空転も多かったが、第2日、次に第3日と次第に具体的に論じるに至って活発

さも増して来た。これには Milner 氏の蔭の努力も大きかったと思われる。提出せられた論文も、既知の理論や手法を一定の言語事実に適用したものよりも、始めから具体的事実と対決したものに、すぐれたものがあったのは、いうまでもない。たとえば G. B. Milner: Initial nasal cluster in Eastern and Western Austronesian (氏はこれによって上記前鼻音化現象は元々 'optional' なものであったのが次第に各言語において morphophonemic な性格を帯びるに至ったと考える、これは一つの有効な見方である) ; R. Roolvink: The passive-active PER-/BER-, PER-/MEMPER- correspondence in Malay (これらの接頭辞使用の歴史的変移を古来の文献を通じてはじめて調査したもの) など。

また研究対象の言語分野として、近來、東太平洋に重点がおかれていること、同時に台湾の土着言語に西洋の研究者の注意が向けられはじめたこと (Egerod, Dyen) が私たちの注意をひき、後者の場合には浅井恵倫教授の業績が常に参考せられていた。

しかし会議を通じて論議の大勢を占めていたのは、比較言語学的、方言学的、また部分的な記述言語学的な論議であった。いずれも言語に対する外部からの外形的な研究であり、多くの場合、結局は事実上、断片のつき合せであった。勿論これも困難な事業であって何びとにも容易にできるものではない。しかし、最も困難なのはやはり個々の言語の内面に立ち入っての有機的且つ全体的な理解に基づく研究である。文体論の session が効果をあげ難かったのもこれによるのであろう。これは西洋における西洋古典語の研究成果とは反対の現象である。いわゆる南方の言語の研究史はいまだ時間的に浅いからでもあろうと思われる。

会議は積極的と消極的意味において、われわれには非常に有益であった。会議のために多大の労苦を払われた G. B. Milner 教授とその一統の方々、主催を引うけられた School of Oriental and African Studies (Director C. H. Philips) と関係政府機関に、われわれはふかく謝意を表しなくてはならない。

(1965年8月記)

総 註

1) この会議の正式の名称は、Conference on Linguistic Problems of the Indo-Pacific Area. London, 4-8, January, 1965.

2) 第5節第1日の部に触れた Glottochronology (Lexicostatistics) の効果については、少くとも私は否定的である。このことは雑誌 Current Anthropology (Chicago) の Vol. 3 (1962), No. 2, 141 において簡単に論じておいた。なお、計量国語学 (Mathematical Linguistics, 13 (1960), 1-17, 'Mathematical Theory and the Validity of Glottochronology', 等。——これらについて、D. H. Hymes 氏からの小さな反論 (Current Anthropology誌上) もあったが、それは依然として無価値であった。わが国における昭部四郎氏の肯定論は、理論的・方法論にはもとより、特に数理的に問題とならない。これについても上記、泉井・'Mathematical Theory……' 参照。

3) 第5節、第3日の文体論の目標としては、依然として、Cicero の著作とせられる 'Ad Herennium', II, 10, 14. の一句に見出される 'voluntas' の概念の解明が重要であろう。すなわち、"Deinde dicemus calumniatoris esse officium verba et litteras sequi, negligere voluntatem." ——つまり片言隻句の穿鑿では無益であり、全体の意図・意思・志向がつかめなくてはならないというのである。これは近來の Karl Bühler のいう 'Ausdruck' と 'Appel' とがつかめなくては文体が論じられないというのと合致している。今回の会議の文体論議では、これが全く欠けていた。このことは、会議の場所が London であり、列席の人たちが主として西洋の知識人であるだけに、私には少し異様にさえ感じられた。